

第9章

人々と暮らし

9.1 エチオピア高地の流動する民族間関係 —コーヒー栽培の拡大をめぐる—

9.1.1 多様な民族が暮らす国：エチオピア

アフリカの「民族問題」といえば、多くの人は民族紛争や大量虐殺といった大規模な民族どうしの争いを思い浮かべるかもしれない。日本にニュースとして伝わってくるのは、ルワンダやスーダンで起きた「民族浄化」といわれる大虐殺の話であったり、そうした殺りくを逃れた避難民の映像だったりする。ところが、この互いに殺し合い、敵対し合うといった「民族」のイメージは、アフリカの「民族問題」の一つの側面にすぎない。多様な民族が暮らすアフリカでは、むしろ、異なる民族の人々がなんらかの日常的な関係を結びながら、生活をともにしてきた。

a. エチオピアの「民族」

80以上の民族が居住するエチオピアでも、歴史的な変動の中で、民族集団は移動をくり返し、ときに入り混じり、あらたな「民族」を生み出してきた。本節でとりあげるのも、16世紀から移動と拡大をつづけてきたエチオピア最大の「オロモ」といわれる民族の居住地域である。20世紀半ば以降、この地域では、商品作物の浸透とともに周辺から移住民が流入し、多様な民族が暮らす農村社会が形成されてきた。いかにさまざまな民族が一つの場所に居住するようになったのか。異

なる民族の者たちがどのような関係をもちながら生活しているのか。そこには、現代社会の重要なキーワードである「民族」という現象を考えるヒントが隠されている。

エチオピアの高地は、標高が1500～3000 m以上にもなり、北東から南西にかけて縦断する大地溝帯をはさんで、エチオピアの中心部をほぼ覆いつくしている。高地世界では、農耕をおもな生業として、牛や山羊・羊などの家畜を飼っており、大半が牧畜に依存する乾燥した低地世界とは、その生態環境を異にしている。北部高地には、キリスト教王朝の歴史をもつアムハラやティグレといったセム系の民族が居住し、南部高地には、エチオピア最大の民族集団であるクシ系のオロモが広く居住している。そのほかにも、西南部の低地には、さまざまな少数の民族集団が見られる。人口割合でいうと、オロモが33%、アムハラが30%、ティグレが6%を占めている。

b. オロモの拡大

ところが、この「オロモ」といわれる民族がエチオピアで最大の領域を占めるようになったのは、それほど古いことではない。16世紀まで、オロモは南部の限られた地域に居住しているにすぎなかった(図9.1)。その起源地や移動の経緯については諸説あるが、最近では、もともと一つの民族集団を形成していたわけではなかった、と

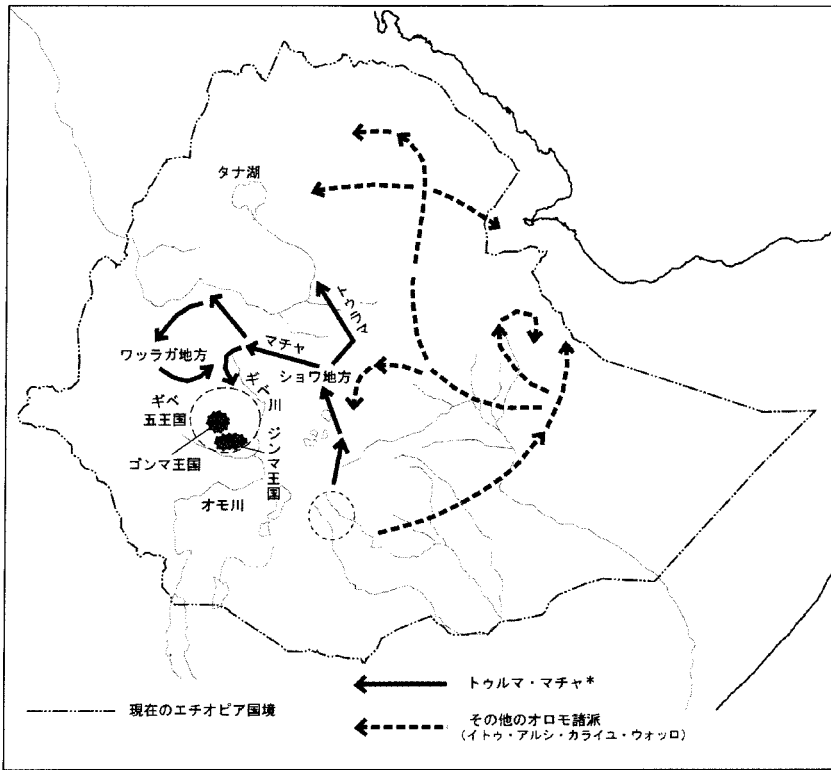


図 9.1 16～17世紀のオロモの大移動と18世紀のギベ五王国の誕生 (National Atlas, 1988 : 70 ; Mohammed, 1990 : 28, をもとに筆者作成)

*トルマ・マチャの移動経路については、Mohammed (1990) に依拠した。

いう議論もある (Mohammed, 1990)。すでに16世紀の大移動がはじまるころには、いくつかの政治集団に分かれており、それぞれが移動の過程で土地の人々を「オロモ化」しながら、新しい環境に適応するために自分たちの生業形態などを変化させていった、というのである。

短期間で広大な領域に移動と拡大が可能だった背景としては、当時のエチオピアの混乱した社会状況が指摘されている (石原, 1996)。16～17世紀に、エチオピア北部高地のキリスト教王国と南東部のイスラーム王国とのあいだで、南部の交易路をめぐる戦争がくり返されてきた。うち続く戦闘によって両勢力ともに疲弊し、エチオピア中央のショワ地方は政治的な空白地帯になった。そこにトゥルマとマチャという二つのオロモ勢力が南から侵入していった。トゥルマはそのままショワ地方にとどまり、マチャはさらに西に進んだ。そして18世紀後半には、その一部がギベ川流域に到

達して、のちにイスラーム化するギベ五王国を形成した。こうして拡大してきたオロモ諸社会も、19世紀末にはショワ地方の王であったメネリク2世によってエチオピア帝国に併合されてしまう。

オロモという民族ひとつをとってみても、その居住領域や人口規模は固定的なものではなく、常に流動してきた。現在でも、オロモには、地域ごとに異なる方言があり、その生業形態や宗教、社会構造にも違いが見られる。低地の乾燥帯で牧畜に依存している集団もいれば、高地で半農半牧の生活を送っている人々もいる。エチオピア正教のキリスト教徒もいれば、ムスリムもいるし、伝統的な神ワカを頂点とした世界観を維持している人々もいる。移動と拡散の過程で、あらたな生態環境へと適応し、歴史的に異なる政治・社会状況を経験してきたことが、こうしたオロモ内部の多様性を生み出してきた。

これから詳しく述べていくのは、変動をくり返

してきたオロモの中でも、ギベ川流域の高地オロモ社会において、20世紀に進行してきたあらたな動きについてである。

c. コーヒー栽培と多民族化

首都のアジスアベバから南西に340 kmほど離れたところにあるジンマという街は、エチオピアの中でも古くからコーヒー栽培やその交易の中心地であった場所として名高い(図9.2)。現在では、オロモ州・ジンマ郡の役場がおかれている。この地域には、大移動をしたマチャ・オロモの一派が定住し、18世紀後半に五つの王国(ギベ五王国)を築いた。

本節でももにとりあげるのは、このジンマ郡の北西部に位置するゴンマ地方の農村社会である。このあたりは、標高が1500~1600 mほどのなだらかな丘陵地帯がつづいており、その斜面にコーヒーが植えられた森が広がっている。年間に1400~1700 mmほどの降水量があり、エチオピアでも有数の緑豊かな地域でもある。

19世紀末のエチオピア帝国への編入以降、特に1950年代ごろからコーヒー栽培が拡大するにつれて、さまざまな民族がこの地域に流入するよ

うになった。生業の変容とともに多民族化してきた農村社会の中で、さまざまな民族がどのような関係を取り結んで暮らしているのか。まずは、この地域に商品作物であるコーヒーの栽培がいかに拡大してきたのか、その過程を紹介しよう。

9.1.2 高地世界におけるコーヒー栽培の浸透

エチオピアはアラビカ・コーヒーの原産地として知られ、1000~2000 mにかけての高地帯で広く栽培されている(図9.2)。エチオピアにおけるコーヒーは、外貨獲得額の60%を占める最大の輸出品であり、総農業従事者の4分の1がその栽培にかかわるほどの重要な商品作物である。人々は毎日のようにコーヒーを飲むことを楽しみ、地域によってはコーヒーの葉をお茶のように沸かして飲んだり、コーヒーの豆を儀礼に使ったりするところもある。コーヒーは、エチオピアの社会や文化に深く根ざす代表的な作物の一つになっている。ここではまず、20世紀前半にジンマ地域でどのようにコーヒー栽培が拡大してきたのか、その歴史的経緯をたどっておきたい。

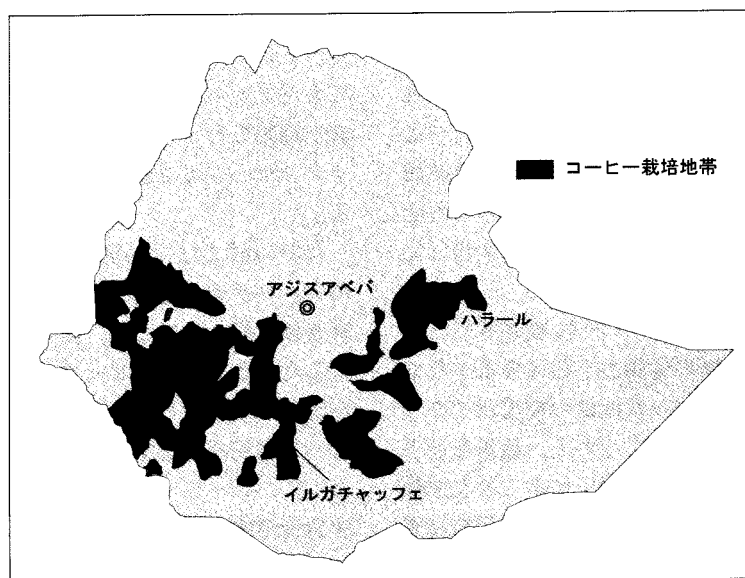


図9.2 エチオピアのコーヒー栽培地帯と主要な生産地 (National Atlas of Ethiopia, 1988 : 43, をもとに筆者作成)

a. コーヒー栽培のはじまり

ジンマ地域では、18世紀後半から栄えたオロモの王国時代には、すでにコーヒー栽培が行われていたとされる (Guluma, 1984)。ただし19世紀前半までは、ほとんどが野生のコーヒーを採取していたにすぎず、この地域を訪れていたキャラバン商人たちもコーヒーを買いつけることはなかった。ところが19世紀後半になると、しだいにコーヒーの価値が高まり、有力者の中には大きなコーヒー林を所有する者もではじめた。それでも、当時の多くのコーヒー林は分散した小規模なものにすぎなかった。

20世紀に入っても、大規模なコーヒーの商業栽培への移行は、なかなか進まなかった。その背景には、1930年代と40年代初頭の世界的な政治経済の動きが大きくかかわっている (Guluma, 1994)。まず1930年代の大恐慌によって、1920年代に高い水準を維持してきたコーヒー価格が急落する。増加をつづけていたコーヒー輸出は、それまでのように利益をあげることができなくなった。さらに、イタリア-エチオピア戦争 (1935-36) とその後の混乱によって、コーヒーの生産量は大きく減少してしまう。農民たちもコーヒーの価格があまりよくなかったために、穀物生産に多くの時間を割くようになった。また、1936年からはじまるイタリアの統治下において、大量の労働力が道路の建設プロジェクトなどに駆り出されたことも、コーヒー生産を縮小させることにつながった。1941年、イタリアによる5年間の植民地支配がおわりを告げる。それでもしばらくの間は、コーヒー生産をめぐる状況に大きな変化は見られなかった。

1940年代を通じて、コーヒー栽培地帯であるジンマ地域では、極度の労働力不足に悩まされていた。それまで一般的だった奴隷の使用がイタリア統治期に禁止されたことにくわえ、輸送交通手段の不備のために出稼ぎ民を利用することも困難だった。さらに、第二次世界大戦期の世界的な需要減少によって価格が低下するなかで、エチオピアの場合、中東とヨーロッパでの戦争のために、欧米市場へのコーヒーの輸送経路を断たれてい

た。こうしたさまざまな悪条件のもとで、エチオピアのコーヒー生産は停滞を余儀なくされる。

1940年代末になると、コーヒー栽培をめぐる状況が急速に好転する。社会生活の回復と輸送システムの改善によって、コーヒー生産への労働力の供給もしだいに可能になってきた。国際的にもコーヒーの需要が急速に増加し、1940年代末には市場価格も回復した。エチオピアのコーヒー輸出は、ふたたび増加に転じる。1948年には、コーヒー輸出の量は1930年代中ごろの数字に近づき、1949年には1934年に記録した輸出の最大量を超えた。1949～54年にかけて、エチオピアのコーヒー輸出量は2倍になり、金額でも240万ポンドから、1億1240万ポンドにまで増加した (Guluma, 1994)。

b. コーヒープランテーションの拡大

1950年代初頭には、ゴンマ地方でも、近代的なコーヒー・プランテーションの開発が急速に進みはじめた (松村, 2002)。このコーヒー栽培の発展は、それまでとは異なる生産者たちによって担われることになる。かつての農民生産者でも伝統的な政治エリートでもなく、官僚の職を辞めた者や、商人、元軍人などがコーヒー生産に参入するようになった。こうした生産者たちのほとんどが、地元のオロモではなく、あらたに他地域から流入してきたアムハラなどの民族で構成されていた。筆者が調査を行ってきたコンバ村も、そうした個人プランテーションが建設された場所に位置している。

コンバ村では、1950年代末から、役人を辞めたアムハラや、近隣の街に住む事業家などが、政府有地を譲り受けたり、オロモ農民から土地を購入したりして、コーヒーのプランテーション経営をはじめた。彼らは、周辺地域に移住していたアムハラ農民などを常勤の労働者として採用するとともに、コーヒーの収穫時期には大量の出稼ぎ民を賃金労働で雇いはじめた。また同じころ、オロモの地元農民たちもさかんにコーヒーの苗木を植えはじめている。政府によってコーヒー栽培が奨励されたこともあり、それまで畑だった土地に急

速にコーヒー林が広がりはじめた(松村, 2005)。農民たちは、プランテーションの集約的なコーヒー栽培を横目で見ながら、自分たちの土地にもカネになるコーヒーを増やしていった。

最初のころ、農民たちは主要な穀物であるトウモロコシと同じく、「ダド」といわれる労働交換によってコーヒーの摘みとり作業を行っていた。これは、複数の農民がそれぞれのコーヒー林で順番に摘みとりを行うもので、互いに労働力を融通しあうことが可能になる。しかし、しだいにオロモ農民のあいだでも、プランテーションに出稼ぎにきていた異民族の者たちが働きだすようになった。1957年ごろからアムハラ地主の土地にコーヒーを植えるはじめたというオロモ農民は、次のように語っている。

「コーヒーの実が収穫されるようになってから最初の5年間ほどは、近くの者たちとダド(労働交換)で摘みとりを行っていた。ちょうどトウモロコシの収穫作業と同じやり方だった。個人プランテーションで働く者が村に来るようになって、(出稼ぎ民の)クッコたちがイルボ(分益制)で摘みとらせてほしいとやって来るようになった。小作の取り分(収穫の1/2)の中から、コーヒーの量によって1/10～1/4(収量が多いほど分配比率は下がる)を出稼ぎ民に分配した。5人ほどのクッコたちは、摘みとり期間の数か月を小作の家の小屋などに寝泊りし、食事を与えられて生活していた」(60代男性からの聞き取り)。

この時期に初めて、地元のオロモ農民のコーヒー栽培に周辺の他民族が「労働者」として関与するようになった様子がかがえる。特にこの地域で「クッコ」とよばれている人々は、かつては奴隷として、そして1950年代以降は、出稼ぎ民としてこのジンマ周辺のコーヒー栽培地帯に労働力を提供しつづけてきた。

c. コーヒーのグローバル化

1974年、エチオピアでは、それまでの皇帝を頂点とする帝政政府が打倒され、社会主義政策を掲げる軍事独裁政権が成立した。この政権は、す

べての土地を国有化し、大地主から所有地を没収して土地のない農民に再分配した。コンバ村でも複数の個人プランテーションや大地主のコーヒー林がすべて差し押さえられ、そこにコーヒーの国営農園が建設されることになった。古いコーヒーの木はしだいに伐り倒され、品種改良されたコーヒーの苗があらたに植えられた。国営コーヒー農園では、専門家の指導のもとで、化学肥料や農薬の散布など近代的な栽培技術が取り入れられ、摘みとったコーヒーを精製する工場や苗木を育てる育苗施設などが作られた。1984-85年には、農園内に残っていた農民がいっせいに追放され、村の多くの者が農園労働者となった。急速に拡張された国営農園には、周辺地域から大量の労働者が流入しはじめた。さらにこの時期には、あらたに組織された農民組合によってコーヒーの集団農園が作られ、農民たちは労働奉仕を義務づけられようになる。

1991年になってデルグ政権が崩壊し、EPRDF(エチオピア人民革命民主戦線)による政権が樹立された。新政権は、土地の国有化政策を維持する一方で、コーヒー価格を自由化し、国家機関が統制していたコーヒーの流通も民間に開放するようになった。1994年には、コーヒー価格が6～9倍も高騰し、村に大量の現金が流れ込んだ。村にはあらたな商店や製粉所が作られ、人々の生活も大きく変わる。コーヒーを売ることによって現金が稼げるため、トウモロコシの畑を耕す者も減り、空き地が目立ちはじめた。

ところが、農産物価格の自由化で、エチオピアのコーヒー栽培も国際市場の価格変動に大きく左右されるようになった。2001年以降の「コーヒー危機」といわれる世界的なコーヒー価格の暴落で、村の農民たちの生活は大きな打撃を受ける。エチオピア高地の農村社会でも、もはや世界的に進行するグローバル化の影響を無視することはできなくなっている。

9.1.3 コーヒー栽培の拡大と民族の多様化

コーヒー栽培の拡大とともに進展してきた民族の多様化の過程を、ここでもう少し詳しくたどってみたい。現在までに、コンバ村ではどのような民族が居住するようになったのだろうか。1994年のセンサスによると、コンバ村の人口は451世帯、1987人（男1011人、女976人）とされている（CSA, 1996）。これをもとに算出した村の人口密度は、1 km²当たり293人となる。隣接するコーヒー農園の労働者たちも居住しているため一概にはいえないのだが、農村部としてはきわめて高い水準にある。

a. コンバ村の民族構成

コンバ村には大小あわせて12あまりの集落がある。このうち2002年に世帯調査を行った10集落（404世帯・1650人）における「世帯主」の民族構成は、オロモが61.4%、つづいてアムハラが18.0%、「クッロ」が8.0%、その他が12.6%となっている（図9.3）。オロモが最も多いが、このうち20世紀のあいだに他地域から移住してきた者が半数近くを占めており、オロモといっても決して一枚岩ではない。この地域に居住するオロモの多くがムスリムであるが、移住してきたオロモのなかにはエチオピア正教徒も含まれている。本文中では便宜的に、所属するクランが

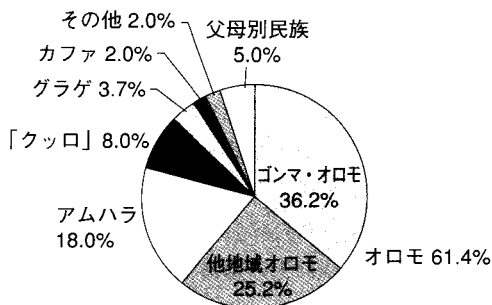


図9.3 コンバ村・10集落における世帯主の民族構成
世帯主の民族構成については、各集落の世帯についてくわしい複数の地元オロモのインフォーマントに対する聞き取りによって集計しており、各世帯の民族集団への帰属意識を調査したものではない。

19世紀末までの王国時代にさかのぼれるゴンマ地方のオロモを「ゴンマ・オロモ」、20世紀になってアデイスアベバ周辺のショワ地方や、西部のワラガ地方、隣接するギベ地方など他地域から移住してきたオロモを「他地域オロモ」として区別している。

2番目に多いアムハラは、長い間、エチオピアの支配的民族であった。特にこの地域がエチオピア帝国の支配下に入った19世紀末から1960年代にかけて、多くのアムハラが流入してきた。「クッロ」は、南部オモ川北岸に居住するダウロヤコンタという小規模な民族集団のことで、前述のとおり、おもにコーヒー摘みの出稼ぎ民として流入してきた人々である。社会主義政権が樹立される1974年以降に、この地に移り住んだ者が多い。調べてみると、ほとんどの者がダウロ出身者であることがわかっているが、村では区別されていないので、本節でも「クッロ」という呼称をそのまま使用する。その他には、グラゲ、カファ、カンバータ、ワライタ、といった現在ではエチオピア南部州に含まれる民族集団のほか、父母が異なる民族出身である者が5%ほどいる。こうした民族的な多様性がコンバ村の一つの特徴である。

b. 移民の定住過程

こうした異民族の者たちは、どのように村に定住するようになったのだろうか。現在、コンバ村の一つの集落の土地について、民族別に土地の所有者の履歴を調べてみた。すると、土地の細分化とともに、多様な民族によって土地が所有されるようになった過程がわかってきた。社会主義革命以前、基本的に3人のゴンマ・オロモによって所有されていた土地が、2000年10月現在で、のべ46人（ゴンマ・オロモ19人、他地域のオロモ10人、アムハラ9人、「クッロ」3人、その他3人、不明2人）の者によって所有されている。特に1980年代、北部のアムハラや南部の「クッロ」などの移民が居住地を手に入れるケースが増えている。

エチオピアでは、社会主義政権下の1980年代末、高地の農村部を中心に「集住化政策」が推し

進められた。コンバ村でも徹底した集住化が実施され、それまで分散していた住居をまとめて特定の場所に集住させられるようになった。この集住化政策のときに、村に定住するための居住地を手にした移住者も少なくなかった。

コンバ村における集落ごとの世帯の民族割合を調べてみると、さまざまな民族が混住している集落もあれば、オロモばかりの集落もあり、それぞれ違いがあることがわかる。なかでも村の中央の道に面する集落には、オロモ以外の民族の者が居住している割合が多い。そこから離れた集落になると、オロモの占める割合がかなり高くなる。あらたな定住者たちは、小さな商店が立ち並び、街への車も往来するような道路付近の土地を中心に居住地を確保してきた。特に1990年代に入ってから、道路沿いの土地が細切れに分割され、農園労働者など現金収入のある者に売却されるようになった。村では、多民族によって構成される道路周辺の世界と、そこから離れたオロモ農民の社会関係が維持される世界とが微妙な距離感の中で

並存している。

こうした人口の流入過程を裏づけるために、南部6集落(122世帯)の世帯主の移住時期について調べた。すると、全体の3割近い人が社会主義時代に移住してきたことがわかる(図9.4)。さらに民族ごとの移住時期をみると(表9.1)、ハイレ=セラシエ帝政時代(1930-74)には他地域のオロモやアムハラに移住が多い一方で、社会主義政権時代(1974-91)には南部からの「クッロ」の流入が特に目立つ。

「クッロ」たちは、早くは1960年代ごろから、季節的な出稼ぎ民としてコーヒーの収穫期にこの地域を訪れ、農民たちのもとでコーヒー摘みをして働いていた。当時、そうした出稼ぎ民が村にとどまることはほとんどなく、コーヒーの時期が終わると自分たちの土地に帰っていった。それが社会主義時代には、南部からの移民がしだいに村で土地を手に入れて定住するようになる。土地を獲得した「クッロ」の多くが国营農園で働いた経験をもっている。国营農園は雇った労働者に住居を提供しているため、他地域からくる者もゼロから生活の基盤を築くことができる。その後、彼らの一部は農園労働で稼いだ金で土地を購入し、村の「農民」になることを選んだ。国营コーヒー農園が、南部からの移民が「定住」するための足がかりになってきたのである。あるオロモの農民は次のように語っている。

「社会主義政権のとき、(土地の再分配政策で)小作が土地をもてるようになって、よそからきていた土地のない他民族が土地を手に入れて村に住むようになった。それにオロモが、お金欲しさにクッロなどのよそ者に土地を売ったり、

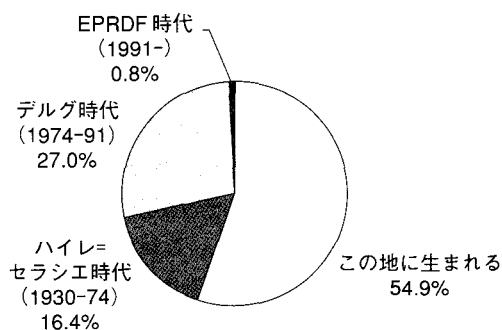


図9.4 コンバ村・南部6集落における世帯主の流入時期 (n = 122世帯)

表9.1 コンバ村・南部6集落における世帯主の民族別移住時期 (n = 122世帯)

民族名	この地に生まれる	帝政時代 (1930-74)	社会主義政権時代 (1974-91)	EPRDF 政権時代 (1991-)
ゴンマ・オロモ	58 (87%)	3 (15%)	3 (9%)	0 (0%)
他地域オロモ	2 (3%)	7 (35%)	10 (29%)	0 (0%)
アムハラ	5 (7%)	7 (35%)	3 (9%)	0 (0%)
「クッロ」	0 (0%)	2 (10%)	10 (29%)	0 (0%)
その他	2 (3%)	1 (5%)	8 (23%)	1 (100%)
計	67 (100%)	20 (100%)	34 (100%)	1 (100%)

アムハラが農民組合の議長になったとき、オロモ以外の者にも土地を与えたりした。コンバは、もうオロモの土地ではなくなってしまう(20代男性からの聞き取り)。

20世紀初頭からはじまっていたコーヒー栽培農村へのさまざまな民族の流入という現象は、1974年の社会主義革命以降の25年間で加速的に進行してきた。とりわけ社会主義時代には、それまでの北部の地主層を中心にしたものから、南部の労働力の流入と定着へと人口移動の性質が変化し、民族の多様化に拍車がかかってきたのである。

9.1.4 コミュニティの内と外

コンバ村には、さまざまな民族の者が住みはじめた。村に移り住むようになった異民族は、コミュニティの中でどのような立場にあるのだろうか。外部から訪れた者たちの社会的地位の変化について、ここで説明しておきたい。移住者たちは、いつまでも「外部者」というマージナルな存在にとどまっていたわけではない。

a. 民族の社会・経済的地位

ともに生活をするようになった複数の民族集団のあいだには、もともとその社会的な立場に大きな違いがあった。これまで述べてきたように、エチオピア帝政時代には、北部のアムハラが地主や役人として、社会的にも、経済的にも優位な地位を占めていた。しかし、社会主義政権の土地の再分配政策によって、大土地所有者の多くは土地を失い、支配的な地位を失墜させてしまう。それ

では、現在、どのような民族集団が有力な立場にあるのだろうか。

コンバ村の土地台帳を見ると、村で上位8人の大土地所有者の中には、地元のゴンマ・オロモが1人も含まれていないのがわかる(アムハラ4人、他地域出身のオロモ3人、父母異民族1人)。かつてのアムハラ地主の子孫にあたる者が、いまだに大きな土地をもっているほかは、社会主義時代以前には土地をもたない小作農民だった者や、労働者や出稼ぎ民として流入しながらも、しだいに多くの土地を獲得するようになった移住者たちが多い。

これらのあらたな富裕層は、さまざまな方法で土地を拡大してきた。たとえば、社会主義時代に農民組合の議長になって土地を獲得した者もいれば、コーヒー取引や製粉所経営、高利貸しのような商売を通して経済的に豊かになった者もいる。もともと土地をもたなかった移住者たちが、いまでは経済的に成功して優位な立場にある。彼らは、有力なコーヒー生産者であったり、影響力のある商人として、村の中で重要な役割を担っている。かつて外部者であった者たちが、今ではコミュニティの中心的な存在にまでなっているのだ。

表9.2は、民族集団ごとの平均土地保有面積を示したものである。これをみると、「クッロ」やグラゲといった小規模な民族集団の出身者が、他の民族にくらべて半分ほどの面積しか土地を保有していないことがわかる。これは、「クッロ」などの移住者たちが、土地をもたない小作や労働者として、経済的に劣った立場に置かれていることを示している。地元の農民は、こうした者たちをコーヒー摘みや草刈り、トウモロコシの収穫、家の建築や柵の補修といった仕事のために、日常

表 9.2 世帯主の民族別の平均土地保有面積 (n = 217 世帯)

民族集団	ゴンマ・オロモ	他地域オロモ	アムハラ	「クッロ」	グラゲ	その他
平均土地面積 (ha)	0.727	0.770	0.989	0.339	0.393	0.723

* 平均土地面積は、行政村の土地税帳簿に基づいて算出した。なお算定にあたっては、コンバ村・10集落に居住する農民世帯のみを対象としている。畑などを保有していないコーヒー農園の職員や労働者は含んでいない。

労働者として雇うことが多い。彼らの労働力は、現在、コーヒー栽培農村において欠かすことのできない存在になっている。

b. 「呪術師」を担う民族

しかし、こうした弱い立場に置かれている少数派の民族の中には、もう一つ別の役割を担う者たちもいる。コンバ村には、男女1人ずつ、2人の呪術師がいる。実は、その2人ともが「クッロ」といわれる民族の出身者であった。さらに、周辺農村を見ても、7人の呪術師のうち、4人が「クッロ」、2人はアムハラ、1人は東部のアルシ地方のオロモであった。最も数が多いはずの地元のオロモではなく、すべて外部からの移住者であることは注目し値する。呪術師たちは、病気を治療したり、人々の争いごとを解決したり、災難の原因をつきとめたりと、村人の生活にとって重要な役割を果たしている。こうした呪術師たちは、キリスト教やイスラームという宗教の枠を超えた影響力をもち、精霊や憑依霊にかかわる農民たちの精神世界を司っている。

人々は、「クッロ」の呪術師が最も強い呪力をもっているという。遠く離れた南部から訪れた異質な民族は、それだけで人々の恐れ／畏れを喚起する存在ともなる。こうした「クッロ」に対する感情は、コミュニティにおける民族間の潜在的な緊張関係を示してもいる。あるオロモ農民は、次のようにいう。

「むかしは、このあたりに、こんなにたくさん呪術師はいなかった。クッロたちが来るようになってから、コンバには悪いこと（呪術）があ

ふれるようになった」（60代男性）。

呪術の興隆という現象が、異民族の流入と密接に関係していたのだ。結果として、従来の社会秩序のあり方は、大きく変容を迫られるようになった。

コンバに住む「クッロ」の呪術師の男性は、社会主義時代に国営コーヒー農園の労働者として移住してきた。しかし、農園の重労働に耐えられず、数年後には仕事を辞め、呪術師に「転職」した。今では、遠方から評判を聞きつけて人が訪ねてくるほどの有名な呪術師になっている。彼自身は、キリスト教徒だが、ムスリムの者であっても、彼をたよりにしている者は少なくない。村に立派な大きな家を建て、何頭もの牛をもち、最近ではハチミツ酒屋の経営まではじめた。全体としては経済的に劣った立場にある「クッロ」であっても、人々に大きな影響力をもつ存在になることもあるのだ。

多様な民族が住む農村社会では、二つの種類の外部者がそれぞれ異なる立場を占めるようになってきた。一つは、経済的に成功して富裕な土地保有者になった移住者たちであり、そして、もう一つは小作や日当労働者という「労働力」としてだけでなく、呪術師として人々の精神生活の鍵を握る「クッロ」などの異民族である。在来のオロモによって構成されていた社会秩序は、こうした異なる民族の移住者によって常に挑戦され、転換を迫られてきた。それは、外部の者が内部秩序の中に統合・吸収される過程ではない。むしろ、外部者が内部者との相互作用の中で、さまざまな要素の入り混じるあらたな秩序をつくりだしてきたの

表 9.3 民族間の婚姻関係 (n = 272 夫婦)

夫の民族集団	妻の民族集団					
	ゴンマ・オロモ	他地域オロモ	アムハラ	「クッロ」	カファ	グラゲ
ゴンマ・オロモ	84 (73.7%)	20 (17.5%)	7 (6.1%)	2 (1.8%)	—	1 (0.9%)
他地域オロモ	32 (44.4%)	28 (38.9%)	4 (5.6%)	5 (6.9%)	1 (1.4%)	2 (2.8%)
アムハラ	10 (18.5%)	9 (16.7%)	22 (40.7%)	13 (24.1%)	—	—
「クッロ」	1 (6.7%)	—	—	12 (80.0%)	2 (13.3%)	—
カファ	—	2 (22.2%)	2 (22.2%)	3 (33.3%)	1 (11.1%)	1 (11.1%)
グラゲ	1 (12.5%)	2 (25.0%)	2 (25.0%)	—	—	3 (37.5%)

* コンバ村の10集落についての世帯調査(2002年10月～11月)より算出

である。もともとコミュニティの外側にいた異民族も、いつのまにかその内側に入り込み、その重要な一角を担いはじめている。

9.1.5 農村社会の流動する民族関係

いまやコミュニティの内部と外部は、必ずしも明確に分けられるようなものではない。さらに民族どうしの関係が流動化し、民族の意識自体が、あやふやなものになっている場面を目にすることもある。「多様な民族がいる」という以上に、民族をめぐる複雑な状況がそこにはある。その背景のひとつとして、異民族どうしの結婚の増加があげられる。

a. 民族間の婚姻関係

表9.3は、コンバ村の10集落における世帯調査から、民族間の婚姻関係についてまとめたものである。これをみると、第1に、ゴンマ地方のオロモ男性は、同じゴンマ地方のオロモ女性と結婚する場合がきわめて多いことがわかる(73.7%)。それは結婚に際して、配偶者の素性を表す「クラン」が大切な要素になっていることを示している。ゴンマ地方のオロモどうしであれば、それぞれのクラン名について互いによく知ることができる。しかし、他地域からの移住者だと、同じオロモであってもクラン名が知られていることはほとんどない。特に、ゴンマ地方のオロモ男性が、「クッロ」の女性と結婚することはきわめてまれである

(1.8%)。

第2に、他地域から移住してきたオロモ男性の80%あまりが、オロモ女性(ゴンマ地方のオロモを含む)と結婚しているのに対し(83.3%)、アムハラ男性はかならずしもアムハラ女性との結婚にはこだわっていない。アムハラ男性の結婚例のうち、59.3%は他民族の女性との婚姻関係になっている。とりわけ、アムハラ男性と「クッロ」女性との結婚が多いことは注目し得る(24.1%)。コーヒー農園に出稼ぎなどでやってくる「クッロ」女性との結婚は、男性が女性の家族に対して婚資を支払う必要がないため、「安価」な選択肢になる。このとき、エチオピア正教徒のアムハラ男性にとって、同じ正教徒でアムハラ語も話せる「クッロ」女性との結婚は、条件的にも都合がよい。人々はよく、「クッロの女性はとても働き者で、いい奥さんになる」という。これは、かつてはあまり好ましいとされなかった異民族間の結婚を正当化する言葉ともとれる。こうした有力な民族の男性が、劣った立場にある民族の女性を嫁として迎え入れるケースは、他の社会でよく見られることだ。

第3に、ほとんどの「クッロ」男性は「クッロ」女性と結婚している(80%)。カファヤグラゲといった他の少数民族の民族が、同じ民族どうしの結婚ばかりでないのにくらべて、かなり特徴的である。これは、「クッロ」と他の民族集団とのあいだに大きな社会的地位の差があることを示している。アムハラ男性が結婚相手としてさまざまな選択肢をもっているのに対し、「クッロ」男性は

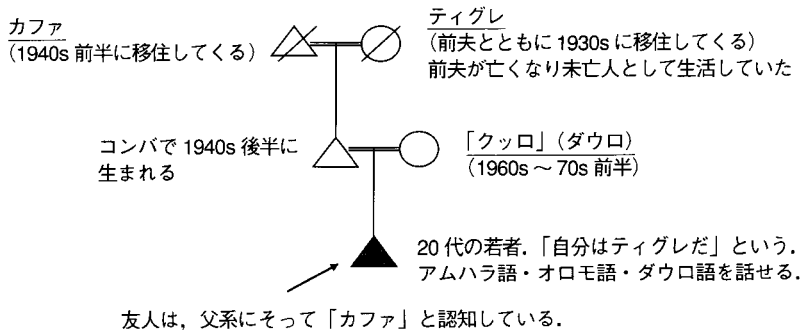


図9.5 ある20代男性の系譜と民族的背景：民族意識についての事例

おなじ「クッコ」の女性と結婚するよりほかない。

このように民族間の婚姻関係には、いくつかの特徴が指摘できる。しかし、いずれにしても、もはやコンバ村では異民族どうしの結婚はめずらしいことではなくなっている。前述のとおり、現在、村の世帯主のうち5%は異なる民族出身の父母をもっている。そして、その世帯主の25%は、自分とは違う民族の配偶者と結婚している。

村に住むある20代の青年は、父方の祖父がカファ、祖母がティグレ、母親がダウロ、といった複雑な婚姻関係のもとで生まれた(図9.5)。あるとき、わたしが「あなたの民族は何か?」とたずねると、彼は「ティグレだ」と答えた。だが横にいた彼の友人は、すぐに「おまえは、カファだろう」といってそれを打ち消した。青年は苦笑いを浮かべたまま黙ってしまった。このやりとりの背景には、「ティグレ」という民族が現政権の中心を担っている有力な民族集団で、「カファ」という民族が南部から移住してきた少数派で社会的地位も低い、という事情がある。さまざまな民族どうしの結婚が進むなかで、特に村の若者たちにとって、民族的な意識があいまいなものになっていくことは避けられないのかもしれない。

b. 民族自治政策と言語使用

ところが、現在のエチオピアでは、こうしたあいまいな民族意識とは、ある意味で逆行するような政策がとられている。それは、1991年にはじまる現政権の民族自治政策である。現在、オロモ州の学校教育では、それまで公用語であったアム

ハラ語に代わってオロモ語が教育言語として採用されるようになった。原則として、子供たちは9年生まで、英語の授業をのぞいたすべての授業をオロモ語で受けなければならない。同時に、大学などに進学するためには、オロモ語の試験を受けることが求められている。

筆者がコンバ村の8年制の小学校で行ったインタビューでは、8年生74人の生徒のうち、21人はオロモ語をほとんど話すことができないと答え、31人はふつう家ではアムハラ語を話すと言った。コンバ村には、コーヒー農園で働く職員の子供たちなど、まったくオロモ語を話せない者も少なくない。こうした状況をふまえて、コンバ村の小学校では、数年前から特例としてアムハラ語で授業を行うクラスを設けるようになった。それでも、オロモ以外の生徒がオロモ語の授業にまったくついていけなかったり、大学進学のために求められるオロモ語のテストで点数がとれないなど、いくつか弊害もでてきている。ただ、村の中の言語をめぐる状況は、それほど単純ではないこともわかってきた。

実際に村人たちは、どのような言語を話せるのだろうか。表9.4は、コンバ村のひとつの集落(151人)で、話すことのできる言語を性別/年代別に調べたものである。それぞれ、「オロモ語だけが話せる」、「アムハラ語とオロモ語の両方が話せる」、「オロモ語以外の言葉(アムハラ語など)だけが話せる」という三つの指標で分けている。これをみると、40歳以上のオロモ女性の大半がアムハラ語を話せないのに対して、すべての20歳以上のオロモ男性はアムハラ語もオロモ語もと

表9.4 コンバ村における民族・性別・年代別の言語使用能力 (n=151人)

言語能力*1	オロモ男性			オロモ女性			非オロモ*2男性			非オロモ女性		
	<20歳	20-40	40≤	<20歳	20-40	40≤	<20歳	20-40	40≤	<20歳	20-40	40≤
オロモ語のみ	2	0	0	0	6	7	1	0	0	0	0	0
アムハラ語とオロモ語	11	13	16	9	13	5	11	6	5	2	8	7
オロモ語以外の言語のみ	4	0	0	4	0	0	7	1	1	9	3	0
計	17	13	16	13	19	12	19	7	6	11	11	7

*1 複数のオロモ農民への聞き取りに基づいて、「オロモ語/アムハラ語で会話ができるかどうか」を判定。

*2 「非オロモ」には、両親のどちらか一方がオロモではない場合を含んでいる。

もに話すことができることがわかる。成人男性にとって、さまざまな社会的場面で使われるアムハラ語を話せる能力は必要不可欠なものとなっているようだ。

また同時に、オロモ以外の民族であっても、オロモ語を話すことが求められている。非オロモの20歳以上の者は、ほとんど男女問わず、ある程度、オロモ語を話すことができる。複数の民族が居住している村においては、特に成人した者にとって、公用語であったアムハラ語にしても、村のマジョリティであるオロモ語にしても、多言語話者であることが社会的に必要とされる能力となっているようだ。街から村への乗合バスなどに乗ると、人々がアムハラ語とオロモ語を相手や話題によってすばやく切り替えながら会話を進めている姿をよく目にする。

現政権の民族自治政策によって、オロモ州における公用語はオロモ語になった。村の集会などでも基本的にはオロモ語が使われることが多い。現在、オロモ以外の民族は、かつて以上にオロモ語を話すことが求められるようになってきている。しかし、非オロモの年長者であっても、ほとんどの者がオロモ語を話せることから、この傾向は、かならずしも近年にはじまったことではないようだ。公用語がアムハラ語であった1990年以前であっても、オロモ語を話す能力は農村社会で生きていくうえで重要なことであった。

c. あいまい化する民族の「印」

このことをうかがわせる場面に出会ったことがある。年老いたアムハラに貧しい女性が、オロモ農民の家に物乞いに来たときのことである。彼女は、流暢なオロモ語で、食べ物がなく困っていること、子供たちが自分の面倒をみてくれないことなどを訴えた。もちろんそのオロモ農民も普通にアムハラ語を話すことができる。そして、農民がいくらかのタロイモを手渡すと、老婆はオロモ語の慣用表現をつかって次のようにいった。

「われわれのオロモの祖先が（ライオンなど）動物を仕留めたときのように、胸を張って自慢しますよ」。

そして、彼女自身はキリスト教徒であるにもかかわらず、オロモのムスリムが用いるアッラーへの祝福の言葉を投げかけながら帰っていった。

このように村では、民族の印となる言語の使用は、かなり柔軟なものになっている。さらに、宗教の区別にしても、時に決定的なものとはいえなくなっている。最近では、エチオピア正教徒から村の多数派であるムスリムへの改宗も見られるようになった。現在、コンバ村におけるムスリムの割合は72%にのぼる。これは、一部にキリスト教徒もいるオロモの人口割合（61.4%）を大きく上回っている。村の全ムスリムのうち、実に13.1%の者は、自分自身あるいは両親がエチオピア正教から改宗した者であった。

村の大通りから離れたところにある集落では、最近、わずかに残っていたキリスト教徒がすべてムスリムに改宗した。街であれば、それぞれの宗教のコミュニティがあり、たとえ少数派であってもその中で生活していくことは可能かもしれない。しかし農村の孤立した集落という密接な社会関係の中では、異なる宗教を保持しつづけることは容易ではない。

エチオピアの人々の生活において重要な役割を担う社会組織として、葬式講がある。たとえば近隣の街であるアガロでは、地縁に基づいた四つの葬式講のほかにも、民族集団や宗教の違いによって四つの独立した葬式講が組織されている。ところがコンバ村では、集落ごとの葬式講しかなく、集落到に居住する者は基本的にムスリムもキリスト教徒も同じ葬式講に所属することになっている。そのため集落の大多数がムスリムである場合、キリスト教徒は困難な立場に立たされる。他にも、異教徒は宗教的な祝祭のときに供出される肉の料理を食べることができなかつたり、逆に結婚や家の新築などお祝いのときに近隣の者に肉の料理をふるまうことができない、といったこともある。集落で宗教的な少数派にとどまっているということは、近隣の者との日常的な社会関係をとり結ぶ機会をかなり限定してしまうのだ。

現在、コンバ村には、たとえ両親がともにオロモではなくても、日常的にオロモ語を話し、イス

ラームに改宗して、まるでオロモであるかのように暮らしている者もいる。年長者以外には、その民族的な背景をあまり知られていないような者もいる。このさまざまな民族が暮らす農村社会では、民族を区別する印がしだいにあいまいなものになりつつある。そして世代が進むにつれて、民族の境界をなんなく乗り越え、別の民族として生きる者もでてくる。村の人々にとって、「民族」という枠組みが、その社会関係や利害関係にしたがって、ある程度、操作可能なものになりつつあるのかもしれない。

9.1.6 混交／生成する「民族」とあらたな「民族問題」

オロモという民族は、人口規模が2500万人を超えるともいわれ、アフリカの中でも有数の規模を誇る民族集団である。しかし、ひとことで「オロモ」という名称でくることができないほど、内部には多様な人々が含まれている。さらに、歴史的にも、16世紀以降の大移動の過程で、もともと異なる分派によって構成されていた集団が、さまざまな人々を「オロモ化」することで拡大を遂げてきた。数世代ほど祖先をさかのぼってみると、オロモとは異なる民族の名前があがることも、めずらしいことではない(石原, 1996)。

エチオピアにおいて、こうした巨大な民族集団である「オロモ」が一つの政治的・文化的アイデンティティを主張するようになり、それがローカル・レベルまで浸透しはじめたのは最近のことにすぎない。オロモ人歴史家であるモハメド・ハサン(Hassen, 1996)によると、1960年代にはオロモ・ナショナリズムの運動が一部の都市エリートによってはじめられたものの、1980年代でも、それが大衆的な運動になることはなかったという。特に農村部のオロモが、エチオピア最大の「オロモ」としてのアイデンティティを意識しはじめたのは、1990年代の民族自治政策によるところが大きい。

現在、エチオピアは、民族の区別にに基づく地方分権的な政治体制下にある。あらたに境界線が引

かれた民族ごとの行政州の地図を見ると、あたかもオロモ州にはオロモの人ばかりが生活しているかのような錯覚を抱かせてしまう。しかし、現実にはそうではない。ローカルな場では、さまざまな民族の者たちが入り混じりながら、ともに生活している。とりわけ都市部ではその傾向が顕著だが、商品作物が集約的に栽培されているような一部の高地農村地帯でも、同じような多民族化が進行してきた。そうした農村社会では、これまで述べてきたような民族をめぐる流動的な状況が生じている。

コーヒーの栽培地帯であるエチオピア高地の村では、既存のオロモ社会の秩序が外部者の影響力のなかで変容すると同時に、言語や宗教という面でのあらたな「オロモ化」が起きていた。それは、たんに「彼ら」という外部者を「われわれ化」するという統合・吸収の過程ではない。もともと「彼ら」と「われわれ」であった者たちが、密接な相互関係のなかで、ともにあらたな「われわれ」を再編成する過程に参画してきたのだ。

いったい「オロモ」とは、誰のことなのだろうか。ここでわれわれは、「民族」という人間集団の定義をめぐる困難な問いに直面する。アフリカのさまざまな「民族問題」についても、固定的な人々の関係からとらえるだけでは限界がある。そもそも「民族」というカテゴリーには、常に流動的な側面がつきまわっている。しかし、同時に忘れてはいけないのは、そうした流動性にもかかわらず、一つの強固な民族の「境界」が政治や社会の場で、くり返し提示されつづけている、ということである(Barth, 1969)。

農村社会に生きる人々も、それぞれの民族を区別する属性があいまいになってきた一方で、互いの素性を尊重し合い、「民族」のラベルを貼り合っている。村という小さな世界のなかで「われわれ」と「彼ら」とを峻別しつづけている。これは、国家という政治の舞台でも変わらない。多くのオロモは、現政権が北部のティグレによって牛耳られ、自分たちが虐げられていると不満をもち、そして、エチオピア政府はオロモの分離独立派の組織

をテロリストとして糾弾し、オロモの民族主義的な動きを常に警戒している。

じっさい2004年にも、政府に批判的なデモを行ったとして多数のオロモ学生が拘留されて死傷者がでる事件が起きた。現代のエチオピアの政治において、オロモという巨大な民族の動向がひとつの不安定要素となっている。人々の民族的な出自とはまた異なる次元で、「民族」を分かち境界が、国民国家の枠組みを揺るがすような火種になってしまっているのだ。

多様な人々が交じり合い、その関係が流動化するような現象が進行する一方で、強固な「民族」というカテゴリーの境界が維持され、再生産されていく。これは、アフリカの多くの国々が国民国家を建設するなかで直面している問題でもある。「民族」の軛を乗り越え、いかに国家としての統合と安定を維持することができるのか。これが前世紀からもちこされてきたアフリカ諸国の課題でもある。

〔松村圭一郎〕

▶ 文献

- 石原美奈子 (1996) : オロモのクラン研究の可能性について, アフリカ研究, 49, 27-52.
 松村圭一郎 (2002) : 社会主義政策と農民-土地関係をめぐる歴史過程—エチオピア西南部・コーヒー栽培農村の事

例から—, アフリカ研究, 61, 1-20.

松村圭一郎 (2005) : 社会空間としての「コーヒーの森」—ゴンマ地方における植林地の拡大過程から—, 福井勝義 (編), 社会化される生態資源—エチオピア 絶え間なき再生—, pp.219-255, 京都大学学術出版会.

Barth, Frederik (1969) : Introduction. In Barth, F. (ed.) ; *Ethnic Groups and Boundaries : The Social Organization of Culture Differences*, Little Brown and Company, pp.9-38.

CSA (Central Statistics Authority) (1996) : *The 1994 Population and Housing Census of Ethiopia, Results for Oromia Region Volume I : Part VI, Statistical Report on Population Size of Kebeles*. Addis Ababa.

EMA (Ethiopian Mapping Authority) (1988) *National Atlas of Ethiopia*. Addis Ababa.

Guluma Gemedā (1984) : *Gomma and Limmu : The Process of State Formation among the Oromo in the Gibe Region, c.1750-1889*. M.A. thesis, Addis Ababa University.

Guluma Gemedā (1994) : Some aspects of agrarian change in the Gibe region : the rise and fall of modern coffee farmers, 1948-76. In Marcus, H.G. (ed.), *New Trends in Ethiopian Studies*. Proceedings of the 12th International Conference of Ethiopian Studies. Michigan State University. Red Sea Press, Vol. I, pp. 723-736.

Mohammed Hassen (1990) : *The Oromo of Ethiopia : A history 1570-1860*. Cambridge University Press.

Mohammed Hassen (1996) : Development of Oromo Nationalism. In Baxter, P.T., J. Hultin, & A. Triulzi (eds.) ; *Being and Becoming Oromo : Historical and Anthropological Enquiries*, Red Sea Press, pp. 67-80.